（淡路島）

おのころ島の玉ねぎと燐硝安加里

河見泰成

連絡船が明石の桟橋を離れて10分もたった頃には，さすがに軽く鼻をついた卵の臭ったようなにおいは消えて海は本来の青さを取りもどしていた。六甲あたりの山脈（やまなみ）は，もう遠くかすんで，船は淡路島の北東部あたり，磯馴れ（そなれ）の松が見える海岸にそってゆっくりと進んで，やがて岩屋（淡路町）の桟橋に接岸した。

〝あのどちらかが洲本行きの筈だが，まだ間があろう。〟と決めこんだのが手抜かり，生理的要求を済ましてて戻ってきてみると，当のバスは見当らない。そして，次のバスにはまだ1時間も間があるという。

〝さて，どうすべい〟と，次第に暮色がただよいはじめた海を眺めていると，〝洲本へおいでじゃろう。どうせ戻り車，安うしとくで…。〟と，タクシーの運転手さんに声をかけられた。

洲本で首を長くしているであろう西森孝さん（チッソ旭肥料大阪営業所）との約束の時間は，とうに過ぎている。渡りに舟…と，さっそくご厄介になった。

〝淡路ははじめて…，玉ねぎの用件で…？そやな，いまは貯蔵物で，栽培はイネの刈取後のことじゃが，お客さん，淡路の玉ねぎいうたら，それこそ日本一やで…。もっともそれだけの理由があるけどなあ。というのは，水田の裏作として作られるものじゃが，イネのあとに玉ねぎのほかに，かんらん，白菜などを栽培するばかりでのうて，こういう野菜を利用して酪農を奨励された田中という，えらいお人がおられますのや。つまりイネ，玉ねぎ，酪農という3本の柱のおかげでなあ，淡路の農家はお金もよう儲けるが，またこのくらい忙しい農家も少ないやろ。折角来られたんじゃけ，島のくらし振りをよう見てきなされ。〟

相手欲しさから声をかけたら，話好きな運転手さんと見え，あとで緑農協の上田さんや，洲本農林事務所の伊達さんなどから伺ったと同じような話をきかせて呉れた。お蔭で一応の予備知識ができた訳だ。

〝お客さんここです…。〟洲本の旅館なら全部知っていると云っていた運転手さんの話通り，陽がとっぷり暮れた洲本市船場町の一角にあるH館前で車を降りた。

案内を乞うと，やがてきりりと太い眉毛の偉丈夫がノッシノッシと階段をきしませながら降りきて，〝おう，さっきからお待ちしとったです。〟と頭を下げた。西森さんである。

玉ねぎの最近の動向と淡路たまねぎの地位

これまでの記述でお判りのように，今度の淡路島訪問は，この島の玉ねぎ栽培と玉ねぎ肥料としての燐硝安加里を取材するのが目的なのだが，出発に先立って玉ねぎというものについてメモをとってみた。

今度の戦争を転機に，われわれの食生活が内容的に相当変ったことは事実である。そこでまず，日常われわれの食卓に上る野菜の生産量をみたら，次のような結果が出た。

（単位 1,000トン）

大根	2951	さといも	524
結球白菜	1867	にんじん	481
キャベツ	1474	その他のつけ菜	476
玉ねぎ	1105	ほうれん草	362
すいか	1017	ごぼう	293
きゅうり	953	とうもろこし	272
トマト	782	レタス	183
ナス	680	ピーマン	103
ねぎ	618		

この頃われわれの食卓に，玉ねぎを材料とした料理が多くなっているが，玉ねぎが110万トン以上も生産されていようとは…。さればこそ万博人気を当て込んで，玉ねぎに対する猛烈な思惑が生れたのも無理はないかも知れない。

なお気がつくことは，40年から44年までの作付面積が大体33,000ha台であるのに，収穫量は40年の859,600トン，42年の938,000トンと100万トン台に達しなかっただけで，43年1,029,000トン，44年には1,105,000トンと，一挙に110万トン台にハネ上った。これは10年前の34年頃にくらべると，正に2倍増という驚異的な数量である。

北海道の45年度産玉ねぎの予想収穫量は，あとに示すとおりだが，北海道を除く内地の主要生産県の作付面積と収穫量はほぼ次のとおりである。

府県名	作付面積（ha）	収穫量（千トン）
大阪	2,820	102
兵庫	3,310	172
和歌山	2,280	79
岐阜	1,240	51

（註．兵庫県のうち淡路島の玉ねぎ作付面積は，23年1,324ha，28年2,040ha，33年2,117ha，38年2,708ha，43年2,856haである。）

細かい説明は省略するとして，参考に45年産の北海道の玉ねぎの生産予想を掲げよう。

主産地	前年対比 作付面積	前年対比 作柄	前年対比 予想収穫	作付面積	予想収穫高
札幌	102%	101%	103%	2,100ha	143,200t
北見	105	147	154	1,110	89,900
計	103	114	118	3,210	53,300

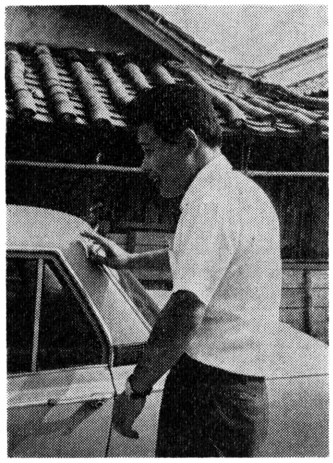
酪農を基幹に，玉ねぎ栽培の経営体型を確立した先覚者たち

〝今日（9月6日）は日曜日ですが，関係の皆さんと緑農協管内の各生産農家を廻って歩きましたが，お蔭様で早く済みましたので，先刻ここに引揚げまして一服，つい今しがた皆さんは帰えられたところですが，夕頃にはあなたが見ゆるちうとで，営農指導に当られておる上田善章さんにご足労を願うとります。非常に仕事熱心な方で，いつも何かとお世話になっとります…。〟

と，西森さんからいろいろ伺っているところへ，

〝やあ，どうも遅うなりまして…。〟と云って当の上田さんが入って来られた。いつも日光が当る野びろい所で活動されているので日焼した，たくましい色つやの持主であるが，感じとしては，むしろ〝きゃしゃ〟で，いつも眼元に微笑をただよわせている人である。

〝淡路の玉ねぎは，この頃とくに有名になった訳ではのうて，兵庫県三原郡の玉ねぎと漬物用大根は，戦前，それもだいぶ以前から京阪神市場へ進出しておったと聞いています。けど…，ここが島じゃということが，本州とそれほど（汽船もあることやし）隔絶されておったという訳やないにせよ，やはり流通面にマイナスでしたわなあ。ところが，戦後のドサクサもおさまり，生活も一応安定してくるわ，フェリーボートの就航で人も自動車も荷物と一諸に気楽に往き来がでけるようになると，村の農業もイネのほかに施設園芸などもとり入れて，近郊園芸としてはもちろん，輸送園芸の生産地として，玉ねぎのように京阪神はもちろん，南は九州から，東は名古屋，京浜から北は北陸市場にまで進出するなど，守備範囲が非常に拡大しましたなあ。〟



お待たせしました，と挨拶される上田さん（緑農協で）

〝しかし，われわれは，島の農業の今日在る土台を築かれた幾多の先覚者の方々，とくに「水稲―玉ねぎ（またはその他の野菜）―酪農経営」という経営体系の基幹確立に専念された田中万米翁の功績を忘れる訳には参らんのですわ…。〟

上田さんが語る田中万米翁は，賀集や阿方などで農業技術員として，昭和9年頃に普及事業に当っておられた方であるが，その頃，淡路島農業の採るべき体系は「水稲―玉ねぎ（またはその他の野菜）―酪農」こそ最も理想的だとし，その指導に生命をかけられた訳だ。今からもう50年も前のことになる。田中翁は米寿に近いご高令だが，いまなお矍鑠として活躍されているということである。残念ながら日程の関係で，今回はお訪ねする機会に恵まれなかった。

当面のライバルは，やはり秋どりの北海道もの

さて，淡路島の玉ねぎの一般的な作型その他について，引続いて上田さんから伺ってみよう。

〝一般的には「あわじ中高黄1～2号―これは晩生種で，播種―9月20日，定植―11月中，下旬，収穫―6月5～10日で，10a当り4.5トンの収穫があります。

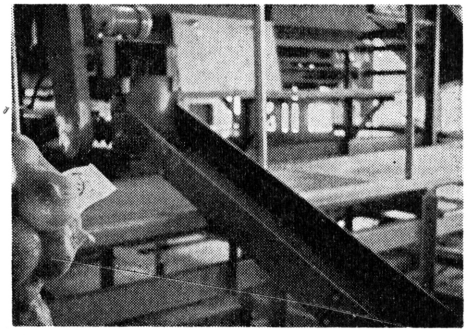
次は極早生種の「貝塚わせ」で，これは播種―9月上旬，定植―10月中，下旬，収穫―5月20日頃，これは大体2.5トンの収穫が見込めます。

玉ねぎの貯蔵小舎（この中にほぼ2,500貫の玉ねぎが入る）

最後は普通早生種の「今井わせ」という品種で，これだと播種―9月12，3日頃，定植―10月下～11月上旬，収穫―5月下旬で，これで4トン程度が見込めます。

また別の行き方として，9月上旬に水稲を収穫してしもうて，あとに年内どりのレタスを栽培し，翌年1月或は2月に玉ねぎを定植する方法と，2月どりの白菜のあと玉ねぎを栽培する（この場合玉ねぎは育苗している）方法もあるのです。いずれの方法をとるかは，結局個々の生産者のそれこそ「思惑」ですわな。いちばん問題になるのは，秋どりの北海道産の動向…。同じ思いは北海道で，いつもこちらの様子を視察に来る。もっとも，こっちゃからも先方の動向を探りに行きますけどな。相見互いと云えば云えましょうが，競争意識は熾烈です。え？万博と玉ねぎ価格の昂騰？さあて…。〟と首をひねる。

さて10a当りの収益性10万円と云われる玉ねぎ栽培ではあるが，所要労働力は水稲（20人）の3倍はかかるという点にも問題があろう。



玉ねぎ選果機（横からみたところ）

〝そのための対策として，手選りから選果機の設置などのほか，できるだけ協業的に作業を行うようにはしておるけど，何せ，この頃のように農業が土台から大揺れに揺れとるのと，農業と積極的に意欲的に取組もうという若い人達がおらんのやないけど，農業後継者の面で問題がないとは云い切れんのですよ。農業経営面における合理化という点では，いつもあれこれ対策は考えておるんやけど，どうも頭が痛いですわ…。〟

〝さて，玉ねぎ用肥料としての燐硝安加里ですが，これについては35,6年頃に県農試で比較試験をやったところ，燐硝安加里がええいうことが判ったのが動機です。それからは，まず洲本に，そして三原郡農協へ，緑農協へ入ったのは38年頃でっしゃろ…。〟

〝10a当り成分量として大体20kgをやりますが，元肥にはPが高うてNの低いもの，追肥は2.3月頃にV型のものをやり，若し4月に入ってやる必要があればNK化成をやります。硝酸態の肥料が玉ねぎの栽培にええいうことは，玉ねぎの貯蔵性に関係がある。云いかえますと，貯蔵性に関係がいちばんあるのはNなのですが，それには硝酸態のNがええのんですよ。〟

〝それにしても，玉ねぎ栽培の場合，この島では十分に厩肥が土壌に還元されるのがええのんやとちがいますか？土壌は大体壌土または砂壌土です。もちろん肥料も大事やけど玉ねぎ栽培の場合，防除作業を怠ることは絶対でけません。他府県産とちごうて，収穫までに前後8回ぐらい防除致します。そうせんことにゃ，くさればかり多うて，到底日本一の玉ねぎはとれませんわ…。それにしてもこのおじさんは（—と西森さんを指さして）何んと，もう6年もこの島へ来とるのです。じゃから，地元のわしらでさえ初めて耳にするようなことまでよう知っとる。島の話はこの人に訊いた方が早いくらいです…。アハ…。〟

西郷隆盛によく似た風貌の西森さんは，何もいわず，笑っていたが，肥料のセールスと根気ということを，しみじみと感じたことだった。ことしの燐硝安加里は，淡路島だけで2千トンは入るだろうという。

3,000万円をかけて製作した大型選果機が……

〝洲本はここまで，これから先が緑町になりますが，両側に見える水田はやがて，ほとんど玉ねぎ畑になるのです。〟といいながら西森さんの指摘する方向に，木造の小舎や，ときには鉄骨製のものが見える。玉ねぎの貯蔵小舎である。

ほぼ10分たらず走ったころ，緑農協に到着した。ひなびた門をくぐった中庭の右の奥に，いま新しい事務所の建設が進められている。これが完成したら，それこそ目も覚めるような感じがすることだろう。

今日は月曜なので，何かと忙しかろうと思われるのだが，〝さあ，参りましょう。〟と上田さんはわれわれをうながし，まず附近にある2.3の貯蔵小屋に自動車を走らせた。

緑農協の冷蔵庫（中央の人物は右から西森さん，上田さん）

〝チョイチョイと欠けてはおりますが，この小舎で大体2,500貫くらい吊ります。昨日も申し上げたように，晩生種にするか，早生にするか極早生にするかは，それぞれ農家の予測（思惑）で決まる訳でして，貯蔵量も，それによって決定されることになる訳です。〟という上

施肥例

肥料名	総量	元肥	追肥 2上	追肥 3上	追肥 4上	成分量 N	成分量 P	成分量 K	備考
堆厩肥	1,200 k	1,200 k				K 3.6	K 2.4	K 4.8	砂壌土で冬期土壌水分の多い圃場
玉葱高度化成	3袋	2袋	1袋			6.0	12.0	12.0	
燐硝安加里604号	2袋			2袋		6.4	4.0	5.6	
N K 化成	1袋				1袋	3.6		2.8	
S I まぐ	5袋	5袋							
計						19.6	18.4	25.2	

田さんの話であった。

車は反転して緑農協の冷凍貯蔵庫と選果場へ…。

冷凍貯蔵庫は玉ねぎのそれと，米のそれとで別棟になっていて，内部が2°Cないし3°Cという玉ねぎの方は，身ぶるいするほど冷たい中に，まだぎっしりと段ボール函詰めの短期貯蔵物と，すかし函（木片でかこい，内部が露出している）の長期貯蔵物が入っていた。いづれも20kg詰で9月7日現在の成行で1函1,000円ということであった。

冷蔵庫内の玉ねぎ（段ボール函の下がすかし函）

3,000万円かけたという選果場は，ガランとしていたが，玉ねぎという特殊な型をしている野菜だけを対象にしたこの選果機の利用効率は，その収益性の故に，それほど問題にならないのかも知れない。

〝それにしましても，玉ねぎに対する生産者としては20kg 1,000円を越えることは，問題だと思うのです。というのは台湾あたりからの輸入が十分引合うようになりますのでねえ。ですから，われわれとしてはどうしても，20kg 1,000円以下に抑えるよう合理化を進めなければならんのです。〟とのこと。

事務所，施設は新らしくなるが，日本の農業が貿易の自由化と嫌応なしに対決せざるを得ない立場にあることそしてその蔭に上田さんのように，これらの対策に腐心している人達のいることを忘れてはなるまい。

われわれは，このあと兵庫県洲本農林事務所に園芸課を訪ね，園芸課長の真野輝雄さん，営農指導担当の伊達逸夫さん，さては真野課長から紹介された「兵庫県玉葱協会」に主事の山口修勇さんらをお訪ねして，いろいろお話を伺った。

とくに，玉葱協会では山口さんがわざわざ三原町の斎藤さんなど，大臣表彰に輝やく生産農家との連絡に努力されたが，いずれも他出中とあってお目にかかってお話を拝聴できなかったのは残念だ。また他日を期することとして，関係の各位のご好誼に厚く謝意を表します。

あとがき

本土へ上陸した台風は四国を縦断して三陸へ抜けた10号ぐらいで，心配された17号も銚子沖はるか東方海上を北上して直接本土の影響はなく，ホッとしました。

米の生産調整をとりまく農業情勢は，今後ますますきびしくなって行くようです。生産農家の方々ばかりでなく，われわれとしても十分に対策を講ずるとともに，新事態の展開に対応できる心構えをしっかり持つことが必要のようです。

卒直にいって，いちばん大事なことが，今いちばん継子（ままこ）扱いされているような感じがしますがねえ。

さて，この頃本誌の購読申込みがだいぶ増えております。編集子にとって，こんなに嬉しいことはありません。ついでながら，お申込みになる場合はご面倒ですが，職業名をハッキリとお知らせ願いたいと思います。（K生）